

クロニクル

1996 年、加賀の国北部の弓道場で、ピロリ金、ノバショ、tsk、てつつあん、てつも神、スギモ、ガリの細巻きの“最初の七人”が出会う。当時、この弓道場は設立より日が浅く、道場の土台と言うべき組織やルール、体制が確立していなかった。そのため最初の七人は、約一年をかけ道場の土台を構築することに力を尽くすことになる。

独善的な兄弟子との対立、真剣に修練に打ち込まない面々の粛清、自道場の優位性を保つための他道場との交渉、連盟の諸師範からの評価向上など、これら全てを、主将のピロリ金のもと、自力、独力で実行した。各分野全般に力を発揮したノバショ、対立や交渉の場面では常に斬り込み隊長を担った tsk、唯一の調整役を果たした てつつあん、先陣参謀から後方支援まで縦横に存在感を見せた てつも神は、のちに星黎 DIVELOOSE の四天王的存在となっていく。一方、この四人は、団という別働隊を組織しており、道場においても団においても、スギモとガリの細巻きのサポートを受けることになる。スギモは団において能動的に活躍し、ガリの細巻きは道場において受動的にその役割を果たした。



☆ “最初の七人” の出会い

1997 年、道場の土台がようやく完成した頃、衝撃的な人物が入門することになる。



夏侯惇一である。当時の夏侯惇一は、現在のような“勇将”ではなく、完全に“磨”という印象であった。色白で体の線の細い少年は、翌年にピロリ金の後を受けて主将となり、後に我らが副代表となる。厳しい諸兄に囲まれ、特にノバショの指導は公私に及んだ。しかし、猛烈なスピードで成長（もはや革命的）を遂げ、“最初の七人”が道場を卒業してからは、孤高のリーダーとして後輩陣を率いた。

☆夏侯惇一の登場

1998 年は、ミスタープラド、シコ、桐ファニ、和田一族長兄を道場に迎えた。道場の土台を創った“最初の七人”、それを継承し孤高のリーダーとして道場を率いた夏侯惇一の時代とは異なり、もはや乱世といえる時代ではなかった。自分たちの立っている場所が、数年前までは乱れ切った場所であったこと、そして、その乱れを治めた諸々の活躍、あるいは挫折を知る代ではなくなったということである。この代のメンバーは、道場を卒業してからの成長が大きかった。故に、ここでは多くを述べられない。夏侯惇一から主将を引き継いだ桐ファニ、団をノバショから任された和田一族長兄こそ一定の活躍を見せるが、他は未だ輝きを放っていない。

☆ミスタープラド、シコ、桐ファニ、和田一族長兄、現る

1999 年、道場からさらなる高みへ。道場を卒業したピロリ金を中心とした“最初の七人”は、卒業生による団体「星黎会」を立ち上げる。これが現在の星黎 DIVEL00SE の原点となるわけだが、当時は兄弟子に配慮し、組織の代表職を彼らに譲った。ただし、実働はノバショを核とした四天王で行っていたため、この時点の組織体は「仮の姿」であった。

道場は、ノバショ妹を主将とする女性政権に移行されていた。ただ、継承されるはずであった道場の土台が崩壊しつつあった。原因は、平穩を謳歌した桐ファニの代が、十分に道場の在るべき姿を後輩陣に伝えることが出来なかったことにある。一時的にノバショ妹は孤軍奮闘となるも、同輩の「女史」、そして新しく入門した後輩陣を得て、この窮地を乗り越えていく。



☆星黎会発足

2000 年の入門者は数十名を数え、また星黎会も人数的には大規模化しつつあった。

道場では、2001 年に超ハンカチがノバショ妹の後を継ぎ主将となる。人数が多く、統率に苦勞するも、弓引きとしては極めて優秀な成績を残す。大会では 12 射 12 中という記録を残し、新聞紙上で名声を高めた。しかしながら、道場では規模の大きさに比例してトラブルが増加し、これ进行处理できない場面が多く

見られた。このあたりはパワサキも渦中の人として苦労した点である。故に、星黎会からコーチを派遣するシステムを導入したが、実質的権限のないコーチでは思い切った改革が断行できず、本質的な改善は図れなかった。

☆超ハンカチ、パワサキ参上

2001 年には、大規模化する星黎会の会員数が 100 名近くにのぼり、体制の変革が求められるようになった。特に、“最初の七人”の兄弟子にあたる会の代表者は、何ら組織運営において機能しておらず、“名実ともに代表者たる代表者”が必要とされた。ここで満を持して奉戴されたのが、ピロリ金である。また、夏侯惇一が副代表に就任、兄弟子全員を実権のない名誉会員とした。これを持って星黎会は新生し、代表人事については理想的な形となった。



さらに、これまで実務の最高指導者であったノバショが第一線から退くことを試み、まずはシコがその後任に抜擢された。この間のシコの努力は特筆すべきものがあり、目覚ましい成長を遂げた。シコの後を受けた和田一族長兄にとっても学ぶところは大きかった。しかしながら、完全にノバショの実務権限を継承することは困難であり、実際に引継ぎを目指す中で、今後もノバショが対応した方が良い部分と、引継ぎ可能な部分があることが明らかになった。

一方、星黎会の大規模化に伴い、この頃からてつも神より「10 年世代分会案」が提唱されるようになる。これは、「いずれ就職し、会の組織運営が難しくなる“最初の七人”を中心とした現体制では、大規模化する星黎会を統率することはできない」とし、その上で「10 年程度の学年差を一区切りとし、星黎会を分会すれば、各分会のリーダーの負担を減らすことが出来、世代間のギャップを埋める苦労も一定量緩和する」としたものである。

☆ピロリ金 星黎会会長就任など、現在の星黎 DIVELOOSE の体制の基盤完成
☆下賀茂の誓い（長兄ノバショ・次兄ピロリ金・末弟 夏侯惇一、義兄弟に）

2003 年、2004 年、2005 年には、ピロリ金以下、多くの星黎会幹部が社会人一年目を迎える。その中で、てつも神の「10 年世代分会案」を実行に移すべく、幹部間の動きが活発化する。この頃、実務面で急激に頭角を現したのが、ミスタープラドである。これまでは桐ファニ、シコ、和田一族長兄の影にいたが、次第にその影響力を高めていく。てつも神の「10 年世代分会案」は、ある意味では過去の星黎会との決別であり、実行の手順を誤ると取り返しのつかないハ

レーションを生むことが予想された。その中で、暗に節目を置きながら、合理的に星黎会を解体しようとするノバショら幹部の意向を、ミスタープラドはよく汲み取った。この洞察力には皆が一目置くようになる。なお、星黎会全盛期といえるピロリ金代表時代の中期から「星黎 DIVELOOSE」への移行までは、おおよそ2年半を費やし、2006年にほぼ現在の形となった。

この間、マリエルが道場に入門する。てつも神の「10年世代分会案」は、ある意味では彼女の存在を節目とすることを狙って実現したものである。



☆マリエルの登場

☆星黎会から星黎 DIVELOOSE へ

2006年頃から2010年にかけては結婚式ラッシュが訪れる。星黎会を解体し、その分会として新たに生まれた「星黎 DIVELOOSE」の最初の仕事は、こうした結婚式の支援や準備だったと言える。この仕事に際しては、結婚という人生の節目にあって「仲間の伴侶となる人を、その仲間と同じように大切な存在と考えよう」という点を大原則とした。一方、仲間同士の交際の仕方、全体としての活動に神経を尖らせる場面が多くなった。しかし、それこそが原点回帰を必要とする瞬間であった。我々の原点は、仁義（仲間を大切にし、仲間に関われて、お互いに助け合うという“ONE FOR ALL”の精神）と正義（己が正しいと信ずることは仲間であっても躊躇なく申し出ること、「義を見て成さざるは勇無き也」）を貫くことにある。この信念のもと、1996年以来、目標に立ち向かい、いくつもの障壁を打破してきた。確かに、結婚を経ることで当事者の環境は変わる。だからといって、自分たちの仁義正義を綻



ばせるまでに神経を尖らす必要はない。それは仲間を大切にすることではなく、仲間の都合に合わせる（一般的に広く社会がそうする中で、我々がそれに染まる必要はない。染まってはいけない。我々としての特殊な価値を失うことになる。）…ということである。こうした中で、それぞれの結婚という節目は、我々にとっても原点回帰、「初心、忘るべからず」を実践させてくれた素晴らしい出来事の連続となった。

☆tsk 結婚 第一子誕生

☆ノバショ 結婚 第一子誕生

☆スギモ結婚
☆夏侯惇一結婚
☆てっつあん結婚
☆ミスターブラド、二部代表就任

2010年の秋には、丹波るり溪温泉にて、発起15年を祝す集会を行った。今年2011年（現在）は16年目にあたる。小さな道場からスタートし、星黎会という大きな団体を築き上げ、それを圧縮した濃密な関係が「星黎 DIVELOOSE」である。

☆ノバショ妹 結婚、名誉会員へ
☆夏侯惇一、第一子誕生
☆tsk、第二子誕生

【筆頭局長として】

同志と呼べる仲間には、家族、恋人と、これからも大切な存在が増えていくはずだ。これは心から歓迎すべき幸福なことである。その中で、相手の置かれている環境に配慮しつつ、仁義正義を貫くという使命を、それぞれが抱いて邁進すると信じている。時として、（これまでもそうであったように）俺たちは、衝突し、お互いを煩わしく思うことがある。しかしながら、俺はその筆頭でありたいと願う。最も衝突し、最も煩わしく思われる人間でありたい。俺は、仮にそうであったとしても仁義正義に背を向けることはない。己が悩み抜いて、その末に出た答えであれば、必ずや仁義正義があると信じているし、それを押し通していく所存だ。とはいえ、“答えが出ない問い”が多い昨今、そんな場合はよくよく同志諸君に相談したいと思う。



全員に向けたメッセージというのは適切な内容が見つからないので、同じく四天王と位置付けられる三人に言いたい。俺たちは、今「局長」という肩書きを、あえて持っている。指導すべき後輩と自分自身を「局」とし、その責任者であることを「長」と示している。俺は、その中で筆頭局長、あるいは局長筆頭なわけだが、当初“筆頭”という言葉が必要だとは思っていなかった。だから、他の三人と同じ「局長」を名乗りたいとしたところ、ある同志に「あなた



の我々の絆づくりへの貢献度は極めて大きい。筆頭を名乗るべき。」と言って頂いた。そして勧められるままに“筆頭”を名乗った。だが、現在は少し異なる想いを、この言葉に対して抱いている。“筆頭”という言葉に一つの真理と拘りを持っているのだ。それは、先にも書いたが「一番嫌われる奴でいよう」「一番煩わしい奴でいよう」ということである。これが、この“筆頭”という言葉の真理ではないか。自分自身が拘るべきところなのではないか。そう思っている。

相手に嫌がられないようにすることは簡単である。相手の意向を察知し、それに合わせれば良いだけだからだ。言っておくが、俺は相手の考えている

ことを察知する力には自信がある。だから、合わせようと思えば合わせられるし、実際多くの場面ではそうしている。しかし、それを我々の、星黎 DIVELOOSE という絆の中で、しかも後輩指導をすべき立場の自分がやって良いのか？答えは当然ノーだ。もう一つ言うと、真に相手から嫌がられたり、煩わしいと思われるためには、正論を叩きつけ、凶星を突かなければならない。単に剛腕で我儘というだけでは、敬遠されて人間関係自体が終わってしまう。そうではなく、「言われていることは正しい（「自分に非がある」）」と感じさせることが、“正しく嫌われる、煩わしがられる”、ということではないだろうか。

とはいえ実際のところ、俺たち局長が嫌われても煩わしがられても、それがいずれ花を開かせる肥やしとなる土壌が、星黎 DIVELOOSE の中にはある。ピロリ金と夏侯惇一である。いずれも、それこそ本気で腹が立つ時がある。頼りないと感じたり、いい加減だと感じたり、そういうことは数知れない。だが、ピロリ金ほど俺たちの苦労や痛みを知っている人間はいない。その様子を目の当たりにしていなくても、ある一つの取り組みに対して俺たちが支払った苦労を、彼は必ず理解している。そして忘れた頃に労いの言葉がある。タイムリーじゃなくても良いんじゃないか？チャンスに強い奴だなんて思ったことないだろ？そして、夏侯惇一ほど自分が大好きな奴はいない。自分の娘をあれだけ可愛い可愛いと言う恥ずかしい奴もいない。だけど、それは彼の愛情の大きさ、伝えわりやすい人柄を表しているんじゃないか？後輩らが、彼のことを好きなワケがよく分かる。そんな奴が後輩に嫌われるとしたら、それは俺たちの本意じゃないだろ。だからこそ、俺たちには、嫌われてでも言うべきこと、やるべきことっていうのがあるんじゃないだろうか。

俺より嫌われる自信があるなら、すぐにでも筆頭を譲ってやっても良い。まあ、それはなかなか難しいだろうけどね☆

皆に伝えたいのは、これが俺たち、所謂四天王の関係だということ。なかなか四人対全員で話す機会はないし、影だけが大きくなっているんじゃないかと思うけど、これで何となく考えていることを分かってもらえるんじゃないかな。そして、俺たちの星黎 DIVEL00SE という船の航路も、少しばかり見えるのではないだろうか。まだ出港したばかり。これから舵を握るのは、少なくとも二人の代表や四天王ではないと思う。

2011 年 11 月 16 日

星黎 DIVEL00SE 筆頭局長 ノバシヨ